

JIE

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION
PRINTED 2024.0830 ONLINE ISSN: 2189-9185
PUBLISHED BY ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES



AUGUST
2024

13

iStock.com / ANASTASIA MANDRYKA

ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES

ORIGINAL ARTICLE

学齢期ダウン症児におけるエンゲージメントの循環プロセス

—複数年にわたる親の語りの分析を通して—

Circular Processes of Engagement in School Aged Down Syndrome Child; Through a Multi-year Analysis of Parent's Narratives

若松 美沙¹⁾, 若松 昭彦²⁾, 下手 佐智代³⁾

Misa WAKAMATSU Akihiko WAKAMATSU Sachiyo SHIMOTE

- 1) 広島大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Hiroshima University
- 2) 広島大学大学院人間社会科学研究科
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University
- 3) 日本ダウン症協会 会員
Japan Down Syndrome Society, Member

<Key-words>

学齢期ダウン症児, エンゲージメント, 親の語り

School aged down syndrome child, Engagement, Parents' narratives

d196516@hiroshima-u.ac.jp (若松 美沙)

Journal of Inclusive Education, 2024, 13:1-21. © 2024 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

本研究は、複数年にわたる親の語りから、学齢期ダウン症児 1 名におけるエンゲージメントの循環プロセスを可視化し、その意味を検討することを目的とした。誕生から小学 3 年生までの循環プロセスを TEM 図で可視化したところ、第 1 期は、将来を見据えて、子どもの目前にあらゆる選択肢が広がるように最大限備える時期であり、子どもがエンゲージメントの基盤を入念に準備する時期であった。第 2 期は、子どもが意志を貫くことを尊重し、動物研究と神楽研究へのエンゲージメントと、その産物としての研究活動の日常化を促進することを期待する時期であり、子どもがいくつかの焦点を絞って夢中を追求する時期であった。第 3 期は、子どもが各研究に工夫を添えるためのエンゲージメントを後押しし、専門家に届ける価値を共有する時期であり、子どもが追求し続けてきた夢中を表現・発信して拓く時期であった。以上から、エンゲージメントには、子どもにとって、地域コミュニティの中での豊富な経験を通じた世界や社会の広がりを獲得し、将来の明確な自己像の描出につながる意味があるのではないかと推察される。

Online ISSN: 2189-9185

This is an Open Access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution NonCommercial-NoDerivs licence (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>), which permits non-commercial reproduction and distribution of the work, in any medium, provided the original work is not altered or transformed in any way, and that the work properly cited.

Received
29 January, 2024

Revised
19 March, 2024

Accepted
9 April, 2024

Published
30 August, 2024

I. 問題と目的

1. 学齢期ダウン症児の理解を巡る我が国の現状

学齢期ダウン症児について、これまでは、運動機能、知的機能、言語・コミュニケーションといった能力的側面の検討が主流であった（橋本, 2005a; 池田, 1983, 1994; 菅野, 1994; 小林, 2021; 黄・窪田・大井, 2006; 水田, 2018）。例えば、学齢期ダウン症児は、微細運動が苦手な活動性に乏しく、精神年齢約 5 歳、知能指数 IQ50 前後がピークとされ、発音が不明瞭で言語理解より言語表出が困難とされる（池田, 1983; 小林, 2021）。こうして学齢期ダウン症児は、「何がどのようにできないのか」が詳細に検討され、効果的な指導支援が提供されている（小島, 2018; 水田, 2018）。しかしながら、代表的な困難を明確化するだけで、学齢期ダウン症児を深く理解したといえるだろうか。

学齢期ダウン症児の理解を深めるためには、本人が抱く想いや願いなど“その子らしさ”の内面世界の育ちを重視し、幸せな人生へつなげることが必要となる（小島, 2018）。“その子らしさ”とは、他者とのかかわりにおいてみえてくる個性（本山・無藤, 1999）、生き生きとして注目を集める表現（梶井, 2001）、関係の独自性（本山, 2004）、関係の中の固有性（小松・紺野, 2014）、得手不得手や傾向等の輪郭（三ヶ田・市川・藤浦・井倉, 2023）と示される。これらから、“その子らしさ”は、その子を中心に据えて、他者との関係性の中で立ち顕れるものといえる。今後は、“その子らしさ”の発露と幸せの獲得のために、他者との関係性の中で「何がどのように立ち顕れるのか」に焦点化したアプローチが必要と考える。

学齢期ダウン症児（者）の幸せに関して、見過ごせない記述がある。正村（2001）は、人間味あふれる社会にすべく、親の視点から次のように語っている。親として、最良の生活を享受させるために時間や努力を費やし、子どもの心の成長・身のまわりへの関心・働きかけを大切にしたり、子どもの気持ちが動いて生活に変化が生じるような小さな突破口を大切にしたりしたが、人間が有する可能性に挑戦する機会が与えられず、はかりがたい不幸であると、我が子と過ごした 40 年を振り返った。多様性や共生が重視される現代社会において、“その子らしさ”を発露することなく、不幸な人生を送らざるを得ない苦しみを誰一人として味わうべきではない。本研究では、第二の不幸（正村, 2001）を生み出さないためにも、他者との関係性の中で、学齢期ダウン症児には「何がどのように立ち顕れるのか」を描出する。

2. 親の語りに注目が集まるダウン症研究

正村（2001）のように親の語りは、社会が課題と向き合う起点となり得る。そもそも、語りは、語り手の身体を通じた行為であり、人生の軌跡、すなわち生きた経験の特殊性や複雑性について豊かな洞察を提供し、その経験の意味を形づくる特質がある（Carless & Douglas, 2017）。以下では、海外で注目が集まる親の語りを分析したダウン症研究（Alesi & Pepi, 2017; Deakin & Jahoda, 2020; Melvin, Meyer, & Ryan, 2019; Steffensen, Rosvig, Santoro, Pedersen, Vogel, & Lou, 2022）を年代順に概観する。

まず、Alesi & Pepi（2017）が、子どもの定期的な身体活動の経験に関する親の語りを分析した結果、親は、身体活動参加への促進要因にも抑制要因にもなると示された。また、親には、子どもが身体活動によって新たなスキルを獲得し、達成感を味わうように情緒面で支援する役割、子どもの可能性を観察し、社会とのネットワークを構築する役割等があると示された。定期的な身体活動は、子どもにとって生活スタイルを見直し、well-being を獲得す

る意味があると示唆された。次に、Melvin et al. (2019) が、専門家からの情報提供の経験に関する親の語りを分析した結果、親は、①専門家主導ではなく家族主導の問題解決力を有する「自助者」となるべく、「今」および「次のステップ」に必要な一貫性・個別具体性のある情報提供や、②将来に向けて現実味があり、希望を抱く情報提供等を求めている。これらの情報提供は、子どもにとって発達の道標となり、対人関係やコミュニケーションを促進する意味があると示唆された。

続く 2020 年以降は、日常の子育て経験における親の語りが重視された。Deakin & Jahoda (2020) は、社会的スティグマが未だに付き纏う中でも、子どもが肯定的な自己認識をもつことで、社会に貢献できるという親の信念を明らかにした。また、Steffensen et al. (2022) は、親の信念として、子どもがより望ましく、自分らしい生活を実現するために、いかに支援しているかを明らかにした。その支援の特徴は、子どもが価値ある人間として潜在的可能性を発揮すること、子どもが地域コミュニティとのつながりを獲得して将来的に貢献すること等を目指していた。

親の語りには、子どもの発達に対する希望や揺るぎない信念が含まれていると窺われる。また、親の語りには、“その子らしさ”の発露として、現在から将来にわたって「何がどのように立ち頭れるのか」という期待が込められていることがわかる。ちなみに、概ね 5・6 歳頃は、ダウン症児と定型発達児の well-being には顕著な差が認められないが、年齢が上がるにつれて well-being の差が拡大し、well-being が固定化するようになる (Shields, Leonard, Munteanu, Bourke, Lim, Taylor et al., 2018)。Shields et al. (2018) は、well-being の差の拡大や固定化を問題視し、小学校入学後の質の高い生活を考慮する必要があると主張する。そのため、well-being を実現するか否かを左右する時期に焦点化して親の語りを分析することは意義があると考えられる。以下では、ダウン症研究において、国内 (小島, 2018) のみならず、海外 (Alesi & Pepi, 2017; Fatima, & Suhail, 2010; Lee, Knafl, Knafl, & Riper, 2021) も着目する well-being について論じる。

3. well-being の構成要素としてのエンゲージメント

2007 年、国際ポジティブ心理学会が創設され、well-being の重要な構成要素として、エンゲージメント (Engagement) という概念が提起された (Seligman, 2011, 2018)。多くの研究者が支持するエンゲージメントの定義は、「進行中の活動において示される行動の強さ、感情の質、個人的な労力投入に関する統合的な心理現象を意味し、コミットメントに特徴づけられた心理変数として、活動や学習の質を規定する (Fredricks, Blumenfeld, & Paris, 2004)」である (Christenson, Reschly, & Wylie, 2012)。また、エンゲージメントは、行動的側面、感情的側面、認知的側面から観察可能な特質を有する (Skinner & Pitzer, 2012)。各側面の説明は、次の通りである (Fredricks et al., 2004; 鹿毛, 2013; Skinner, 2016, 2020)。行動的側面は、どの程度、課題に注意を向けて努力し粘り強く取り組んでいるかを指す。感情的側面は、どの程度、興味や楽しみ、面白さといったポジティブ感情を伴って取り組んでいるかを指す。認知的側面は、課題について、いかに計画・モニターし、問題解決プロセスとして取り組んでいるかを指す。

Skinner (2016, 2020) によると、エンゲージメントは、文脈、自己、表出、結果の仮説循環型プロセスのうち、表出に区分される。エンゲージメントを長期かつ頻繁に観察・面接することで、子どもの生活経験の意味理解につながるとされる (Fredricks et al., 2004;

Fredricks & McColskey, 2012; Thiessen, 2006; Yazzie-Mintz & McCormick, 2012)。特に、多くの研究によって、親は、小学校低学年から中学年にかけて重要な社会的文脈とされ (Rickert & Skinner, 2022; Skinner, 2016, 2020; Underwood & Killoran, 2012)、親の配慮や対応等の働きかけが子どものエンゲージメントに影響を与えている (Skinner & Belmont, 1993)。エンゲージメントの好循環 (Rickert & Skinner, 2022; Wang & Hofkens, 2019) について、例えば、親の働きかけによって、子どものエンゲージメントが高まる。子どものエンゲージメントの高まりを親が観察すると、子どものエンゲージメントの高まりを支援し続けようとする。Wang & Hofkens (2019) や Rickert & Skinner (2022) は、今後の方向性として、こうした子どものエンゲージメントと親の働きかけの間の好循環に着目し、相互作用の力学に関する議論の進展が必要と述べている。

4. ダウン症研究の進展に向けた検討事項の整理

以上をまとめると、まず、学齢期ダウン症児の理解を深めるために、他者との関係性の中で「何がどのように立ち顕れるのか」を描出する必要性が示されていた。次に、国内外のダウン症研究では親の語りに注目が集まっていた。そして、親の語りの分析によって、親の信念等が具体化されていた。さらに、多くの親が求める子どもの *well-being* の構成要素として、海外では、エンゲージメントという概念が重視されていた。加えて、親はエンゲージメントの重要な社会的文脈とされていた。しかしながら、これらの知見を統合的に扱い、学齢期ダウン症児の理解を深めようと試みた研究は見当たらない。特に、親が語る子どもの *well-being* は、漠然としたものであり、各側面から成るエンゲージメントのような特定の概念に依拠しているわけではない。そのため、本研究では、これまでのダウン症研究の成果と課題を考慮するとともに、次に挙げる検討事項が必要と考える。

1 点目は、親の語りを長期的に追跡する縦断的検討が必要とされている点である (Riper, 1999)。縦断的検討によって、エンゲージメントがどのように立ち顕れているのか、子どもと親との間でどのような循環が生じているのかを描出できると考える。2 点目は、*well-being* につながる諸活動として、リズムや音色を感じて表現する身体活動 (Alesi & Pepi, 2017; Heller, Hsieh, & Rimmer, 2004) の他、多様な年齢層と関わる組織的活動、動植物と触れ合う自然体験活動等が挙げられている点である (Barnoy, Biton, & Itzhaki, 2017; Lee et al., 2021; Sloper, Turner, Knussen, & Cunningham, 1990)。本研究では、子どもが、どのような諸活動に対してエンゲージメントを表出するのかを明らかにする必要があると考える。3 点目は、目的的サンプリング (purposive sampling)、つまり、協力を依頼する親の文化背景、経験を考慮する点である (Bertrand, 2019; Melvin et al., 2019; Porter Braza, Knox, Vicente, Buss, & Leibold, 2023; Riper, 1999; Shields et al., 2018; Steffensen et al., 2022)。本研究で協力を依頼する条件は、① *well-being* を実現するか否かが左右される時期 (Shields et al., 2018)、すなわち、小学校低学年の子どもを育てている親、② 諸活動に対する子どものエンゲージメントを長期的に観察している親、③ 研究者からエンゲージメント概念の説明を受けて、その概念と自身の子育てとを重ね合わせて共感を抱いた親とした。

5. 本研究の目的

そこで、本研究では、複数年にわたる親の語りから、学齢期ダウン症児におけるエンゲージメントの循環プロセスを可視化し、その意味を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 研究協力者と倫理的配慮

研究開始時の 2022 年度に、公立小学校に通う 2 年生のダウン症児 (A 児) をもつ親 (B 氏) を研究協力者とした。A 児の就学前評価による新版 K 式発達検査では、認知・適応 237 (発達指数 57/発達年齢 3 歳 0 ヶ月)、言語・社会 122 (同 60/同 3 歳 2 ヶ月) であった。身体虚弱だが、水泳や相撲、動物、神楽等への興味関心がある A 児は、1 年生から通常の学級に在籍している。2 年生 5 月以降、所属校管理職の推薦で大学附属の相談機関に月 2 回程度継続して訪問している。ここでは、A 児と筆頭著者が、詩集の読み聞かせ、自由研究、遊びの 3 セットを約 2 時間実施している。詩集の読み聞かせの目的は、豊かな感性を磨くこと (塚田, 2021)、楽しみながらのことばへの関心・獲得、ことばの精緻化等の言語能力を高めること (橋本, 2005b, 2005c) である。自由研究の目的は、主に動物や神楽について、図鑑や紹介 DVD 等を参考にして、内面世界にあることばや文章をノート、模造紙等にまとめ、「自分で研究した」という達成感を味わうこと (橋本, 1994) である。遊びの目的は、主に、ミニチュアの動物を使ったふり遊びを通して、学校や家庭生活での経験を再現したり、動物対動物の戦いごっこを中心に自然界での動物の姿を再現したりすること (腰川, 2005) である。

B 氏は、相談機関の訪問前から、A 児が「行きたい。やりたい。」と望んだ際には、その意思表示を尊重し、可能な限りその場所に連れて行っていった。A 児が五感をフル活用した経験を重ねることを大切にしていたためである。また、B 氏は、将来を見据えて、A 児 1 人で買い物や床屋等に行けるように支援していた。B 氏には、研究開始直後に筆頭著者がエンゲージメント概念の大枠 (若松・若松, 2021) を文書および口頭で説明した。B 氏は、エンゲージメント概念の説明を受けた後、複数回にわたり、「子どもがエンゲージメントを表出することの良さ」について、講演会で子育て経験を語るとともに、子育て経験について地元新聞社からも取材を受け、記事として紹介されている。一般的知見によると、親は、子どもの強みに基づく、尊重的・支持的な家族中心ケアを求めている (Fordham, Gibson, & Bowes, 2012; Melvin et al., 2019)。そのため、エンゲージメント概念は、B 氏の求めに沿った情報提供であったと考える。

本研究は、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て行われた (HR-ES-000285)。研究実施上の配慮として、強制ではなく自由意思によること、途中で止める自由があること、調査への不参加による教育・学習上の不利益は生じないこと、個人情報保護を徹底すること、取得データの保存管理を徹底することを伝え、B 氏から同意の署名を得た。

2. データ収集

研究目的に応じてあらかじめ面接項目を具体的に設定し、語り手 (B 氏) と聴き手 (筆頭著者) の相互作用によって新たな意味が生成される半構造化面接を行った (徳田, 2013, 2018)。表 1 は、B 氏への面接ガイドを示したものである。面接項目は、仮説循環型プロセス (Skinner, 2016, 2020) やエンゲージメントの好循環 (Rickert & Skinner, 2022; Wang & Hofkens, 2019) を基に、「エンゲージメントの表出場面」、「各場面でのエンゲージメントの背景 (文脈)」、「各場面でのエンゲージメントの産物」、「エンゲージメントの循環」、「エンゲージメントによる他者の反応」、「エンゲージメントの捉え方」の 6 観点を尋ねた。

面接は 4 回実施した。1 回目は、B 氏が 2022 年度を含むこれまでの A 児を想起した語り

あった。2 回目は、1 回目の面接を踏まえて、筆頭著者からの追加の質問への回答であった。3 回目は、B 氏が 2023 年度の A 児を想起した語りであった。4 回目は、3 回目の面接を踏まえて、筆頭著者からの追加の質問への回答であった。全ての面接を逐語記録化すると、29552 文字であった。5 回目以降は、後項に示す TEM 的飽和 (サトウ, 2015) に向けて、元小学校教員で所属機関の研修相談員証を有する筆頭著者と B 氏の双方が納得するまで協議を重ねた。

表 1 B 氏への面接ガイド

エンゲージメントの 表出場面	<p>お子様が、家でエンゲージメントを表出していることはありますか？</p> <p>お子様が、どのような場面（諸活動）で、どんな風にエンゲージメントを表出したかを具体的に思い出していただきたいです。</p> <p>—行動的側面：具体的にどのような行動や発言をしましたか？</p> <p>—感情的側面：具体的にどのような表情や気持ちだと思えますか？</p> <p>—認知的側面：具体的にどのようなことを考えていたと思えますか？</p> <p>お子様が、家でエンゲージメントを表出していることが他の場面（学校等）にも反映したかもしれないというエピソードはありますか？</p>
各場面での エンゲージメントの背景	<p>お子様のエンゲージメントの背景には、何があると思えますか？</p> <p>お子様のエンゲージメントには、どのようなサポートが必要だと思えますか？</p> <p>どのようなサポートがあれば、お子様はエンゲージメントを表出すると思えますか？</p>
各場面での エンゲージメントの産物	<p>お子様の■に対するエンゲージメントが、お子様のためになったと思えたエピソードはありますか？</p>
エンゲージメントの循環	<p>お子様が、今までに長い期間、エンゲージメントを表出し続けている（た）ことを思い出していただきたいです。</p> <p>—■にエンゲージメントを表出し続けたことで、お子様はどのように変化しましたか？</p> <p>—それは、今にどのようにつながっていると思えますか？</p> <p>—エンゲージメントを今後も表出し続けることでどのような期待をされますか？</p>
エンゲージメントによる 他者の反応	<p>お子様がエンゲージメントを表出したことで、保護者様を含めて、周囲の人物に影響を与えたことはありますか？</p>
エンゲージメントの 捉え方	<p>お子様が、エンゲージメントを表出することについて、どのように捉えていますか？</p>

3. データ分析方法

本研究では、前述の通り、複数年にわたる親の語りの分析を通して、子どものエンゲージメントの立ち顕れ方、子どもと親との間の循環を描出する。そのために、個人の経験のプロセスを示すのに適切で（芝崎, 2023）、実現する人間発達や人生径路について、複線性や多様性、潜在性・可能性を時間経過のなかでとらえる「複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling : TEM)」に着目する (安田・サトウ, 2020)。TEM には、いくつかのポイントや力がある (上川, 2023; サトウ, 2015; 安田, 2015)。等至点は、個々人が固有で多様な径路を辿っていても、時間経過のなかで等しく到達するポイントを示す。必須通過点は、等至点を経験したほとんどの人が共通して経験する同様の出来事や突きつけられる行動選択のポイントを示す。分岐点は、文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイントを示す。社会的方向づけは、等至点に向かう個人の行動や選択を阻害する力を示す。社会的助勢は、等至点に向かう個人の行動や選択を後押しする力を示す。

本研究で B 氏が語った、A 児の経験の径路である TEM 図の作成手順は、以下の通りである。まず、面接で得られた逐語記録を意味のまとまりごとに切片化し、切片化した出来事を経験の質としての時間順に並べて、ラベルをつけた。次に、等至点と、価値的に背反する両極化した等至点に向かう径路上に、必須通過点と分岐点を配置した。その際、実際に生じた

径路を実線で、実際には生じなかったものの理論的に存在すると考えられる径路を点線で結んだ。そして、分岐点に加わる社会的方向づけや社会的助勢の力を示した。その後、各ポイント等を軸に時期を区分した。TEM 図の真正性を担保するため、①前述したように、筆頭著者と B 氏が何度か協議して双方が納得するとともに、②A 児の経験が理解でき、意味のある両極化した等至点を設定する TEM 的飽和達成 (サトウ, 2015) を図った。

Ⅲ. 結果

図 1 は、A 児におけるエンゲージメントの循環プロセスを TEM 図で可視化したものである。結果を説明する際は、【 】を時期区分、〈 〉を必須通過点および分岐点、《 》を等至点および両極化した等至点とする。第 1 期は、五感をフル活用した経験を起点とする【入念に準備する時期】とした。この時期を経て、第 2 期は、動物と神楽を選出する【いくつかの焦点を絞って夢中を追求する時期】、第 3 期は、動物や神楽の専門家に向けて【追求し続けてきた夢中を表現・発信して拓く時期】とした。等至点に向かう必須通過点には、第 1 期と第 2 期との間に〈動物／神楽研究に着手する〉があり、第 2 期と第 3 期との間に〈動物／神楽研究の本文を仕上げる〉があり、第 3 期以降に〈動物／神楽研究の成果が実る〉があった。そして、研究に着手した後は、〈研究したい意志〉を貫くか否か、〈研究活動の日常化〉を促進するか否かの分岐点があった。また、研究の本文を仕上げた後は、〈研究を専門家に届けたい意志〉を踏まえて工夫を添えるか否かの分岐点があった。このような径路を辿り、A 児は、等至点《動物博士 (飼育員) になりたい／神楽博士になりたい》に到達した。その一方で、A 児が、仮に第 1 期を辿らなかった場合、両極化した等至点《何もうたたくない》が生じた可能性がある。同様に、第 2 期を辿らなかった場合、《なりたいたがみつからない》が生じた可能性がある。以下では、時期区分ごとに、B 氏の語りも交えながら A 児におけるエンゲージメントの循環プロセスを描出する。

1. 第 1 期 入念に準備する時期

第 1 期は、五感をフル活用した経験の一例として、水泳、相撲、動物、神楽、生演奏、童謡・童話を挙げた。水泳は、1 歳半から継続して毎週プールに通い、水流や水圧で皮膚を刺激して体力づくりをする経験を重ねた。相撲は、3 歳から、祖母の存在が社会的助勢となり、祖母とテレビ番組を見て、力士同士のように勝負ごっこする経験を重ねた。生演奏は、1 歳半から継続して毎週リトミック、6 歳から継続して毎週ピアノに通い、曲調に合わせてリズム感よくノリノリで踊ったり、ピアノの音色に親しんだりする経験を重ねた。童謡・童話は、胎児の頃から 3 歳頃までの間、両親や祖母が社会的助勢となり、CD の歌声を聴いたり、童話の物語を読む声を聴いたりして、歌の振付や物語のことばに反応する経験を重ねた。

次期にも影響を与える動物に関して、B 氏は、「赤ちゃんの頃、ほとんど夜泣きをしなかったのですが、動物園へ行った後、夜中に 2 回程、ひどく夜泣きをしたことがあったので、ゾウの夢でも見たのか、よほど動物のインパクトが強かったのだと思います」と語った。こうした動物園訪問後の夜泣き後も、動物園の年間パス保有の両親の存在が社会的助勢となり、毎週末は閉園 30 分前の到着になろうとも県内の動物園を訪問し続けた。

また、保育園児の頃から、牧場主の存在が社会的助勢となり、平日夕刻は乳牛、黒毛和牛、馬等がいる牧場を訪問し続け、除糞やエサやりの手伝いを何十回、何百回も経験するとともに、搾乳機の運搬や仔牛へのミルクやり等の手伝いも数回経験した。例えば、除糞は、専用の T 字型用具を使って、重たい糞を手前の溝に集める手伝いをした。エサやりは、牧場主から教わった通り、牛 1 頭ずつの大まかな分量、馬 1 頭ずつの計測器を用いたグラム単位の分量を所定の場所に置く手伝いをした。その様子を見ていた牧場主からは、「牧場に毎日来ているから、体幹が強くなってきたのではないか」と何度も褒められた。こうして、毎週末の動物園訪問と平日夕刻の牧場訪問がルーティン化した。その後、例え動物園で母親が道に迷う社会的方向づけがあったとしても、動物園への継続訪問が社会的助勢となり、A 児の方向感覚が醸成されて動物園マップが読めるようになった。

神楽に関しては、6 年生のお兄さんお姉さんの存在が社会的助勢となり、小学 1 年生の時、学習発表会で 6 年生の伝統神楽を鑑賞して憧れた。6 年生には、同じ習い事に通っているお兄さんの他に、入学以降ずっとお世話をしてくれる伝統神楽太鼓役のお姉さん、登校時一緒に優しく声をかけてくれる伝統神楽鬼役のお兄さんがいた。その後、伝統神楽鬼役のお兄さんと仲良くなり、神社で神楽を習っていると話してくれた。しかしながら、社会的方向づけとして、小学校の統廃合により、翌年以降の学習発表会での伝統神楽は廃止となった。

2. 第 2 期 いくつかの焦点を絞って夢中を追求する時期

小学 1 年生までのこうした五感をフル活用した経験の径路を基盤として、第 2 期は、小学 2 年生以降に焦点化した動物研究と神楽研究の各径路を取り上げた。まず、動物研究の径路にある必須通過点〈動物研究に着手する〉から〈動物研究の本文を仕上げる〉までの径路を描出する。A 児は分岐点〈研究したい意志〉を貫く径路を選択し、時間の許す限り、僅かな時間での動物園訪問、敢えて話しかけずにそっと見守る両親の存在、動物紹介の看板等からことばに自然と触れる機会が社会的助勢となり、以下に示す各側面からのエンゲージメントがみられた。表 2 は、動物研究についての A 児におけるエンゲージメントに関する B 氏の語りを示したものである。なお、表では特徴的な語りのみ示す。行動的側面では、動物を数十分見入る姿として、動物の仕草や鳴声を模倣する様子、動物紹介 DVD や図鑑に関心を示す様子があった。感情的側面では、動物への熱い眼差しを向ける姿として、嬉しそうな表情や真剣な表情、世界に入り込む様子があった。認知的側面では、動物の特徴を思考する姿として、動物名と種類、動物園にあることばを理解したり、ことばを表出したりする様子、動物同士の闘い方、体の色や形、大きさ、走る速さや住む場所をノート 25 頁分にまとめる様子があった。

表 2 動物研究についての A 児におけるエンゲージメントに関する B 氏の語り

行動的側面	<ul style="list-style-type: none"> ・大好きなシマウマの前で 40 分から 50 分、そこから動かずずっと見ていることがありました ・自宅で大人しくしている息子のところへ行ってみると、動物図鑑を集中してじっと見ていることがよくあります
感情的側面	<ul style="list-style-type: none"> ・動物を見るときは目がキラキラしています
認知的側面	<ul style="list-style-type: none"> ・動物園や動物図鑑の動物の名前を最初は指差して私たちに読んでと言っていましたが、最近自分から、動物の名前等を自然に平仮名やカタカナや少しずつ漢字で読めるようになりました ・動物同士の闘いが面白くて期待しているのだと思います

これらの径路を経て、A 児は分岐点〈研究活動の日常化〉を促進する径路を選択した。以下には、エンゲージメントの産物としてのエピソードを挙げる。表 3 は、動物研究についての A 児の各エピソードに関する B 氏の語りを示したものである。エピソード 1-1 は、動物番組に出演する飼育員の案内が社会的助勢となり、動物園ナイトサファリ訪問では飼育員になりきって得意そうに案内役になる姿があった。エピソード 1-2 は、ドライブ中の車のナンバーや道路標識が社会的助勢となり、動物園がある地名に注目し、漢字表記の県内外の地名と場所を対応させながら漢字を徐々に覚える姿があった。エピソード 1-3 は、動物園での異年齢児の存在が社会的助勢となり、年下の子どもへの気配りとして、爬虫類館で怖くない大丈夫と声かけをする姿があった。エピソード 1-4 は、不特定多数や様々な年齢層の方の存在が社会的助勢となり、親の会でのイベントでは、初対面の方に対しても臆することなく動物に関する話題を提供して質問する姿があった。そして、A 児は、不明瞭なことばに囲まれる社会的方向づけがあったとしても、ことばに溢れた生活の中で、「お静かに」という爬虫類館にある看板と図書館にある看板を関連させるなど、動物園にある平仮名や漢字を他場面でも読むようになった。A 児は、数か月間をかけて、必須通過点〈動物研究の本文を仕上げる〉に到達した。

表 3 動物研究についての A 児の各エピソードに関する B 氏の語り

エピソード 1-1	・ナイトサファリで、A 児が急に「これが水牛です。見えましたか?」「それでは次へ行ってみましょう」「それではこれで終わります」等、飼育員さんになりきって案内してくれました
エピソード 1-2	・県外のナンバープレートを見て「〇〇から来てる」「どこ?」等言って地名に興味をもつようになり、いつの間にか大阪や神戸や福岡等、よく見る地名は漢字で読めるようになりました ・旅行雑誌『につぼんの動物園』に出てくる動物園がある県名と、自宅に貼っている日本地図の県名や特産物と、実際に行った動物園の場所とが少しずつリンクしてきているようです
エピソード 1-3	・爬虫類館へ行ったときに、A 児が 3 歳の男の子に「大丈夫だよ」「これはキンカジュウ」「次は大きなへびがいるよ」と案内していました
エピソード 1-4	・親の会のイベントに初めて参加したときに、「好きな動物を聞いてみようか」と自分から初対面の方たちに話しかけに行っていました ・母親の私抜きで会話が続いていることに対して、ある保護者の方から母親の私に「こんなにいつもしゃべっているの?」と驚いて聞かれたので、「好きなことは一日中ずっとしゃべっているんですよ」と答えました ・今まで一方的に動物の話をしていましたが最近は少しずつですが相手の人の話を聞こうとする態度もみられるようになったので、A 児にとって動物の話題はわかることが多く楽しいので会話が続くようになったのだと思います

次に、神楽研究の径路にある必須通過点〈神楽研究に着手する〉から〈神楽研究の本文を仕上げる〉までの径路を描出する。動物研究と同様に、A 児は分岐点〈研究したい意志〉を貫く径路を選択し、公演日や公開場所、演目といった神楽情報を収集するために様々な手段を講じ、登場人物になりきって一緒に舞い、古典的なセリフを翻訳する両親の存在が社会的助勢となり、以下に示す各側面からのエンゲージメントがみられた。表 4 は、神楽研究についての A 児におけるエンゲージメントに関する B 氏の語りを示したものである。行動的側面では、恐怖感の克服を図る姿として、暗い会場や太鼓の大きな音に慣れようと努めている様子があった。また、神楽を終始見入る姿として、実演鑑賞し振付模倣や紹介 DVD に関心を示す様子もあった。感情的側面では、神楽への熱い眼差しを向ける姿として、目を大きく見開く様子、口をぎゅっと閉める様子、音色に合わせた舞をする様子があった。認知的側面では、神楽の特徴を思考する姿として、神楽団名と演目を結び付けるとともに、演目ごとの登場人物等をノート 14 頁分にまとめる様子、演目の展開に応じた古典的なセリフを理解したり、セリフを表出したりする様子があった。

表 4 神楽研究についての A 児におけるエンゲージメントに関する B 氏の語り

行動的側面	<ul style="list-style-type: none"> ・花火や映画館など暗くて大きな音がする場所は怖くて苦手なのですが、神楽の会場では怖がりながらもちょっとずつ中に入って観ようとしています ・神楽の公演では一緒にノリノリで舞っていますし、車の中では大音量で神楽の DVD をかけています
感情的側面	<ul style="list-style-type: none"> ・目をまん丸に大きく見開いて口をきゅっと閉じた表情になります
認知的側面	<ul style="list-style-type: none"> ・始めは『八岐大蛇』や『滝夜叉姫』などの演目を言っていました、最近は『〇〇（場所）神楽』などと、神楽の場所や神楽団にも興味を持ち始めているのかなと思いました ・A 児に「何を言っているの？」と聞かれますので、何を言っているのか A 児にわかるように翻訳して、答えるようにしています

これらの径路を経て、動物研究と同様に、A 児は分岐点〈研究活動の日常化〉を促進する径路を選択した。以下には、エンゲージメントの産物としてのエピソードを挙げる。表 5 は、神楽研究についての A 児の各エピソードに関する B 氏の語りを示したものである。エピソード 2-1 は、力強い声量感の神楽の演目が社会的助勢となり、明朗快活な声を出すようになる姿があった。エピソード 2-2 は、ドライブ中の神社や寺院が社会的助勢となり、神楽と縁ある場所に注目し、立ち寄ってお参りをしたり、鳥居・社殿・狛犬の像・動物の像を見て喜んだりする姿があった。エピソード 2-3 は、様々な年齢層の方の存在が社会的助勢となり、神楽ファンとのつながりでは、神楽に関する共通の話題で盛り上がり質問する姿があった。そして、A 児は、不明瞭なことばに囲まれる社会的方向づけがあったとしても、ことばに溢れた生活の中で、店内の「大特価」を「大蛇」の「大」と関連させたり、カレンダーの「土曜日」を「土蜘蛛」の「土」と関連させたりするなど、神楽団名や演目に出てくる漢字を他場面で読むようになった。A 児は、数か月間をかけて必須通過点〈神楽研究の本文を仕上げる〉に到達した。

表 5 神楽研究についての A 児の各エピソードに関する B 氏の語り

エピソード 2-1	<ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんの頃はあまり大きな声で泣いた記憶がないため声小さいのだと思っていたのですが、最近神楽の影響で大きな声を出して舞うようになってからか、普段もびっくりして感動するくらい大きな声が出るようになったように思います
エピソード 2-2	<ul style="list-style-type: none"> ・神社の鳥居や寺院の建物などを見ると「何神社？」と聞いてきます ・神社へ行った時は「神社の神は神楽の神で同じだね」と言っています
エピソード 2-3	<ul style="list-style-type: none"> ・神楽ファンの方に神楽について詳しく教えてもらっているので、コミュニケーションをとるきっかけになっていると思います

3. 第 3 期 追求し続けてきた夢中を表現・発信して拓く時期

動物や神楽に対して夢中を追求する径路を経て、第 3 期は、小学 3 年生以降にみられた動物研究と神楽研究の各径路の続きを取り上げた。まず、動物研究の径路について、A 児は分岐点〈研究を専門家に届けたい意志〉を踏まえて、ノートにまとめた本文をコピーして模造紙に貼って工夫を添える径路を選択し、絵具やカメラ等の必携品を揃えることが社会的助勢となり、以下に示す各側面からのエンゲージメントがみられた。表 6 は、動物研究と後述する神楽研究の A 児におけるエンゲージメントに関する B 氏の語りを示したものである。行動的側面では、動物園を訪問した際、動物の特徴が伝わる写真を求める姿として、粘り強く何度も撮影を繰り返す様子があった。感情的側面では、動物研究への誇りを示す姿として、真剣な表情や満足そうな表情を示す様子があった。認知的側面では、細部のよりよさを吟味する姿として、写真の向きや位置を工夫し、各動物の配色も工夫し、将来への決意文を執筆する様子があった。

表6 動物研究と神楽研究のA児におけるエンゲージメントに関するB氏の語り

行動的側面	・A児がどんな風に写真を撮っているか、その様子を私が撮ったメイキング写真を見ていただけたらわかりますが、何度も写真を撮り直していました
感情的側面	・A児は、真剣に仕上げに取り組んでいましたので、自信につながったと思いました
認知的側面	・A児が撮った写真をハサミで切ったりノリで貼ったり、色を塗ったりと集中して取り組んでいました

これらの径路を経て、以下に挙げるエピソードがあった。A児は動物園に動物研究の成果を持参し、その当日にいた飼育員と子どもからの称賛があり、記念写真を撮る姿があった。その後、社会的助勢として、A児の動物研究を動物園事務所で掲示したと、普段からよく話をしていく飼育員から手紙が届いた(表7)。なお、手紙は、平仮名で書かれたものであった。また、同じ飼育員からB氏宛にも手紙が届き、職員一同とA児の素晴らしさを共有した旨が記載されていた。このように、第2期と第3期の間にある必須通過点〈動物研究の本文を仕上げる〉に到達した後も、A児は、更に数か月間をかけて工夫を添えて、必須通過点〈動物研究の成果が実る〉に到達し、等至点〈動物博士(飼育員)になりたい〉に至った。

表7 飼育員から届いた手紙の一部

素晴らしい研究結果を見せていただきありがとうございました。動物の特徴がよくわかりました。また、A児さんは動物のことが大好きなんだとわかる写真で、大変素敵でした。私たちの動物園にいないカバやゴリラについても調べて教えてくださいましたので勉強になりました。これからも研究を続けて動物博士になってください。そして、博士が明らかにしたことをまた教えてください。これからもよろしくお願いします。
--

次に、神楽研究の径路について、A児は分岐点〈研究を専門家に届けたい意志〉を踏まえて、ノートにまとめた本文をコピーして模造紙に貼って工夫を添える径路を選択し、動物研究と同様のことが社会的助勢となり、以下に示す各側面からのエンゲージメントがみられた。ここでのB氏の語りは、表6と重複するので割愛する。行動的側面では、神楽の公演を訪れた際、神楽の特徴が伝わる写真を求める姿として、粘り強く何度も撮影を繰り返す姿があった。感情的側面では、神楽研究への誇りを示す姿として、真剣な表情や満足そうな表情を示す姿があった。認知的側面では、細部のよりよさを吟味する姿として、写真の向きや位置を工夫し、各演目の配色も工夫し、将来への決意文を執筆する姿があった。

これらの径路の途中からは、以下に挙げるエピソードがあった。小学校の校長が神楽部のある高等学校と連携し、高等学校でのオープンスクールに参加したことが社会的助勢となり、その神楽部に神楽研究の成果を持参し、神楽部顧問や神楽部に所属する高校生からの称賛があり、記念写真を撮る姿があった。その後、その様子を高等学校の校長が高等学校の学校通信で紹介したこと、高等学校と神楽団の共催による神楽体験教室の募集があったことが社会的助勢となり、A児は、複数回神楽体験教室に参加し、最終的には、衣装を着て舞台上で太鼓を打ち客席から拍手があり、神楽体験教室より修了賞が授与された。その後、再度、その様子を高等学校の校長が高等学校の学校通信で紹介したこと、子どもの自由研究について、市立の小学校教育研究会(社会科部会)からの募集があったことが社会的助勢となり、A児が神楽団員へのインタビューをまとめた成果を応募し、後日、研究会より努力賞が授与された。インタビューの内容は、「神楽はいつから好きか」「好きな神楽の演目は何か」であった。このように、第2期と第3期の間にある必須通過点〈神楽研究の本文を仕上げる〉に到達した後も、A児は、更に数か月間をかけて工夫を添えて、必須通過点〈神楽研究の成果が実る〉に到達し、等至点〈神楽博士になりたい〉に至った。

以上、A 児とともに辿った径路を総括して、B 氏は次のように語った（表 8）。1 点目は、上述の等至点とも関連し、エンゲージメントの循環による A 児の変化についてである。2 点目は、A 児のエンゲージメントが B 氏に与えた影響についてである。3 点目は、A 児のエンゲージメントが B 氏以外の他者に与えた影響についてである。4 点目は、A 児のエンゲージメントを B 氏がどのように捉えているかについてである。これらは、A 児が辿った 9 年間の径路を B 氏が洞察し、その経験を意味づけた語りである。

表 8 B 氏が語った A 児とともに辿った径路の総括

A 児の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・最近朝目を覚ました瞬間、本当に目を開けた瞬間に「大きくなったら動物の博士になりたい」と言っていますし、学校には「動物博士になるために行ってくるね」「動物ランドを作ってくるね」と登校し、「学校行ってきたよ」「動物の飼育員になるために日記するね」と言って笑顔で下校してきます ・長期休業中の間の登校日も「大きくなったら神楽の人になりたいから漢字ドリルががんばってくるね」と言って登校しました
B 氏に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> ・私にとって子育ての方向性がわかって、とても気持ちが楽になり、今までやってきたことは無駄ではなかったんだろうなと思って、今後も楽しみながら続けていこうと思いました ・動物園や牧場へ子どもを連れて行くと「やったー」と目を輝かせてびよんびよん飛び跳ねながら大喜びをしていますので、子どもが喜んでいる姿を見ると、私も嬉しくてまた連れて行ってあげようと思いますし、幸せな気分になります
B 氏以外の他者に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の校長先生から学習発表会で小学 6 年生は神楽をすることになったと聞きました ・A 児が通う小学校は小中一貫校です。20XX+1 年度から中学校では、だいたい 11 月から 2 月の運動部がオフシーズンの間、神楽部をすると校長先生からお聞きし、校長室に神楽のお面が飾られてあり、校長先生は生徒たちに色々な経験をさせるためだとおっしゃっていました ・統廃合前に神楽をやっていたり地域の方とのつながりや高等学校の校長先生とのやり取りなどがあつたりする中で、直接きっかけになったわけではありませんが、少しだけでも A 児が影響していたら嬉しいなと思いました
B 氏の捉え	<ul style="list-style-type: none"> ・障害がある子どもの親として、育児書通りにはいかない子育てに戸惑を感じることもありましたが、障害があることで A 児は療育や訓練三昧の人生になっていたかもしれませんし、できないことに目がいてしまい、その部分を直したりできるようにしたりしたくなることもあったと思います ・障害の特性上、ことばが出るのが困難な場合が多いと聞くことがあるため、A 児が好きなことを次から次へと話している姿を見ると感動しますし、好きなことを通して発達が促され、好きなこと以外の成長にもつながってきていると感じています ・親が無理やりやらせたわけではなく、自発的に習得しているところが素晴らしいと思います ・大人は子どもが夢中になっていることに対して、行動範囲を広げるサポート、つまり、現時点では例えば県外の動物園や神楽体験やホテルでの外泊や外食などをすることで、子どもは社会経験が豊富になってくると思います ・子どもには、自宅と学校、将来的には自宅と職場の往復ではなく、特に障害があると放課後等デイサービスやグループホームや作業場等に行動範囲が限定される可能性もありますので、“もっと世界は広いんだよ”“もっと社会は広いんだよ”ということ、夢中になることを通して経験して知ってほしいと思います

IV. 考察

1. 第 1 期 入念に準備する時期

第 1 期の結果から、第 1 期は、B 氏の視点では、将来を見据えて、A 児の目前にあらゆる選択肢が広がるように最大限備える時期、A 児の視点では、【入念に準備する時期】と命名した。B 氏も正村（2001）と同じように、親として可能な限りの時間や努力を費やし、A 児との様々な経験に対して促進要因（Alesi & Pepi, 2017）となるべく寄り添い続けていることが推察される。A 児にとっては、多彩で豊富な遊び経験（例えば、Barnoy et al., 2017）となり、自然と生活環境が整えられていった（池田, 1983, 1994; 腰川, 2005）と考えられる。

言語・コミュニケーションの発達を支える 3 要因として、対人関係、認知能力、運動能力があるとされる（菅野, 1994）。B 氏の語りによると A 児は、4 歳頃からことばを数語程度表出し始めたが、A 児の発達を支えた要因としては、特に動物園や牧場では、両親や牧場主を

はじめとする他者とのコミュニケーションに加えて、馬や牛等の様々な動物との触れ合いがあったと考える。そのコミュニケーションや触れ合いに伴って、視覚、聴覚、触覚等の感覚を働かせ、例えば、動物園マップや除糞の手順、えさの分量等の情報を知覚し、これまでの経験を基にどう行動に変換するかについて認知も働かせていたと考える。さらに、動物園や牧場を連日訪問することで、体幹を鍛え、思い通りに身体を動かすことが可能となったと考える。ダウン症の特徴として、多くの場合、知的障害を有し、筋緊張の低下や運動発達の遅れを伴うことで、スキルの習得に時間を要する場合があるとされているが（橋本, 2005a; 池田, 1983; 小林, 2021; 水田, 2018）、A 児は、生命と出逢い、認知を働かせ、体幹を鍛える実際の経験を積み重ねる径路が支えとなって、発達が徐々に促され、夢中を追求する基盤が養われていたのではないだろうか。

2. 第 2 期 いくつかの焦点を絞って夢中を追求する時期

第 2 期の結果から、第 2 期は、B 氏の視点では、A 児が意志を貫くことを尊重し、動物研究と神楽研究へのエンゲージメントと、その産物としての研究活動の日常化を促進することを期待する時期、A 児の視点では、【いくつかの焦点を絞って夢中を追求する時期】と命名した。この時期は、親が重要な社会的文脈とされ（例えば、Rickert & Skinner, 2022）、親の働きかけが子どものエンゲージメントに影響を与えるとされる（Skinner & Belmont, 1993）。しかしながら、子ども一人一人が何に対してエンゲージメントを表出するかは異なり、その立ち廻り方も多彩である。そのため、実際には、親に求められる働きかけは、親のその時々判断に委ねられている現実がある。親が自信をもって判断を下す場合もあれば、そうでない場合もあると考えられる。

こうした現実を踏まえて、個別の事例検討を進めた本研究では、TEM 図上に、A 児におけるエンゲージメントと併せて、その時々両親の働きかけを具体的に描出することを試みた。A 児の場合は、動物や神楽に対するエンゲージメントの描出につながった。そして、両親が時間の許す限り、そっと見守ることで、動物の仕草や鳴声を模倣する行動的側面からのエンゲージメントや、動物の世界に入り込む感情的側面からのエンゲージメントがみられた可能性がある。また、両親が神楽情報を探し出し、一緒に舞うことで、暗さや大きな音に慣れる行動的側面からのエンゲージメントや、音色に合わせた舞を楽しむ感情的側面からのエンゲージメントがみられた可能性がある。そして、両親が古典的なセリフを分かりやすく翻訳することで、そのセリフを理解し、表出する認知的側面からのエンゲージメントがみられた可能性がある。仮に、そっと見守っていなかったり、神楽情報を探さなかったり、古典的なセリフを翻訳しなかったりしたら、上述したエンゲージメントはみられなかったのではないだろうか。このような A 児の場合に加えて、他の事例検討も行っていく中で、親の働きかけと子どものエンゲージメントに関する議論の活性化が必要と考える。そうすれば、より多くの親が、より多くの場面で、自信をもって判断を下すようになると考える。

第 2 期は、エンゲージメントの産物としての研究活動の日常化までを描出した。それは、A 児らしさの発露を可視化し、A 児の理解を深める（小島, 2018）ためである。両親以外の他者との関係性の中で、動物園では年下の子どもに対して心配りのある声かけをしたり、親の会でのイベントでは初対面の方にも質問したりするようになった。また、神楽ファンともつながって共通の話題で盛り上がるようになった。これらから、A 児を取り巻く地域コミュニティ（Steffensen et al., 2022）の間では、動物や神楽が好きで話題が途切れることがなく、

気配りができる A 児が少しずつ印象づけられていったと考えられる。A 児の興味関心を重視し、ダウン症の強みである良好な対人関係を活かした経験の蓄積が、一般的な特徴とされる表出言語の遅れや言葉の不明瞭さ（池田, 1994; 菅野, 1994）などの改善・克服につながっている可能性がみてとれる。また、ダウン症の特徴を踏まえて指導プログラムを開発した菅野（1994）によると、ことばの発達を支える学齢期の遊び場面では、動きの模倣の活用が取り上げられている。A 児は、動物の仕草や鳴声を模倣したり、神楽の舞を模倣したりすることで、ことばの発達も併せて促されたと考えられる。

3. 第 3 期 追求し続けてきた夢中を表現・発信して拓く時期

第 3 期の結果から、第 3 期は、B 氏の視点では、A 児が各研究に工夫を添えるためのエンゲージメントを後押しし、専門家に届ける価値を共有する時期、A 児の視点では、【追求し続けてきた夢中を表現・発信して拓く時期】と命名した。この時期は、親に加えて、親以外の他者が重要な社会的文脈となったことに着目する。A 児の場合は、動物の専門家である飼育員、神楽の専門家である神楽部の高校生や神楽団の他、社会科を専門とする小学校教師組織で自由研究を評価する研究会が該当する。夢中の表現・発信として、動物研究の成果を持参して飼育員に知ってもらうことで飼育員から手紙が届いたり、神楽研究の成果を持参して神楽部の高校生に知ってもらうことで高等学校の学校通信で紹介されたりする経験を通して、A 児を取り巻く地域コミュニティ（Steffensen et al., 2022）の幅が広がったと考えられる。B 氏の語りで示したように、幅の広がりによって、A 児は、徐々に将来の自己像を明確に思い描くようになり、将来のために日々為すべきことを考えられるようになったのではないだろうか。

また、A 児のエンゲージメントが、B 氏の子育てのみならず、小学校の校長の学校教育方針にも少なからず影響を与えた可能性があることにも着目する。TEM 図の作成や、複数年にわたる B 氏の語りの分析によって、エンゲージメントの好循環や、エンゲージメントの相互作用の力学（Rickert & Skinner, 2022; Wang & Hofkens, 2019）を可視化することにつながったと考えられる。B 氏は、これまでの A 児とともに辿った径路を総括し、気持ちが楽になること、子どもが喜ぶと嬉しいこと、幸せな気分になることを語った。B 氏自身も、A 児の動物や神楽に対するエンゲージメントを直接観察することで、B 氏の子育てに対するエンゲージメントを呼び起こした可能性がある。ただし、子育ての留意点としては、ダウン症の特徴には個人差があるため、ダウン症児本人が抱く想いや願いなどを考慮する必要がある（小島, 2018）と考えられる。他方で、B 氏の語りからは、小学校の校長も、高等学校の校長との連携を通して、A 児の神楽に対するエンゲージメントを間接的に観察することで、一度廃止になった学習発表会での伝統神楽を復活させたり、A 児が将来通うことになる中学校で神楽部を限定的に創設したりして、校長の神楽を取り入れた学校教育方針に対するエンゲージメントを呼び起こした可能性がある。校長からの働きかけには、障害の子どもを観察し、研究し、方法を工夫する心（正村, 2001）が含まれていると考えられる。

いくつかのダウン症研究（Deakin & Jahoda, 2020; Steffensen et al., 2022）では、親の語りから信念が描出されている。B 氏の信念としては、子どものエンゲージメントに対して、行動範囲を広げるサポートをすることで、子どもが世界や社会の広がりを経験することではないかと考えられる。正村（2001）も交流を拡大する努力が必要と述べている。実際に B 氏を含む A 児の両親には、A 児が小学 3 年生に至るまで、動物園と牧場訪問のルーティン化や

神楽情報の収集などのサポートを重ねた軌跡があった。こうした両親の努力が実を結び、A児は地域コミュニティの一員として徐々に社会化していったのではないだろうか。

V. 総合考察

1. 本研究で得られた知見

本研究の目的は、複数年にわたる親の語りから、学齢期ダウン症児におけるエンゲージメントの循環プロセスを可視化し、その意味を検討することであった。本研究では、他者との関係性の中で「何がどのように立ち顕れるか」を描出するために、well-beingの構成要素であるエンゲージメントという概念に着目した。そして、仮説循環型プロセス (Skinne, 2016, 2020) を基に、循環に関する議論 (Rickert & Skinner, 2022; Wang & Hofkens, 2019) を進展させるべく、個々人の人生径路を可視化する分析方法 TEM (安田・サトウ, 2020) を適用した。

本研究で得られた知見をまとめると、仮説循環型プロセスの内、TEM図の作成によって、文脈、表出、結果の循環プロセスを可視化した。具体的には、第2期から第3期にかけて、文脈として両親を中心にして多様な他者の存在があり、表出として各側面からのエンゲージメントの具体像が見出され、その結果として日常化を促進したエピソード、成果を持参したエピソードが多く挙げられた。こうした好循環が実際に生じた一方で、TEM図の特質上、実際には生じなかった径路も存在し、悪循環に陥ってしまう場合もうかがわれた。例えば、子どもが意志を貫かない径路、日常化を促進しない径路、工夫を添えない径路も考えられた。また、両親からの働きかけが子どもよりよい選択の後押しとならず、阻害する力にもなり得たと考えられた。その場合、自己像を明確に思い描けない状態が続き、最終的にはその状態が固定化する可能性も考えられた。個別の事例検討を進めた本研究を契機として、一人一人が多様な可能性を有する学齢期ダウン症におけるエンゲージメントの循環プロセスに関して、議論を活性化させることが期待される。

2. 学齢期ダウン症児におけるエンゲージメントの意味

ここでは、学齢期ダウン症児におけるエンゲージメントの意味を子どもの視点と親の視点から検討する。子どもの視点では、A児は、動物や神楽に対する行動、感情、認知の各側面からのエンゲージメントによって、動物研究や神楽研究をしたい意志を貫き、研究活動の日常化を促進し、研究を専門家に届けたい意志を踏まえて工夫を添える径路を辿って、最終的には研究成果が実り、動物博士や飼育員、神楽博士になりたいという将来の自己像を思い描くに至った。こうした径路を総括したB氏も語っているが、エンゲージメントには、子どもにとって、地域コミュニティの中での豊富な経験を通じた世界や社会の広がりを獲得し、将来の明確な自己像の描出につながる意味があるのではないかと推察される。

このように、子どもの視点でのエンゲージメントの意味は、前半と後半に分かれている。前半について Skinner (2016) は、エンゲージメントは、子どもにとって、学びのエンジンであると述べている。実際A児にとって、エンゲージメントは、動物や神楽についての学びのエンジンであったと考えられる。分析結果から、訓練ではなく、無理やりやらせたのではなく、自発的に各側面からのエンゲージメントがうかがわれた。動物や神楽について知っていることを増やしたい、知っていることを多様な他者と共有したいというエネルギーが次々

と沸き起こっているエピソードも数多く挙げられた。こうして、学びのエンジンとしてのエンゲージメントによって、A 児が、地域コミュニティの中での豊富な経験を通じた世界や社会の広がりを獲得することにつながったと推察される。

同様に、後半について Skinner (2016) は、エンゲージメントは、子どもにとって、径路選択のガイドであると述べている。実際 A 児にとって、エンゲージメントは、動物博士や飼育員、神楽博士になるための径路選択のガイドであったと考えられる。分析結果から、研究したい意志を貫く径路を選択した後、各側面からのエンゲージメントがうかがわれた。そして、その表出を経て、研究活動の日常化を促進する径路を選択した。その後も、研究を専門家に届ける意志を踏まえて工夫を添える径路を選択し、エンゲージメントがうかがわれた。このようにエンゲージメントと径路選択は、不可分の関係にあった。こうして径路選択のガイドとしてのエンゲージメントによって、A 児が、将来の明確な自己像を描出することにつながったと推察される。

続いて、学齢期ダウン症児におけるエンゲージメントの意味を親の視点で検討する。B 氏は、A 児が幼い頃から五感をフル活用した経験に対して促進要因となるべく働きかけを続けていた。また、A 児が意志を表明した際、時間の許す限り県内外の動物園訪問に付き添うとともに、様々な手段を講じて神楽情報を収集していた。そして、こうした径路を総括し、今までの子育てが間違っておらず今後も楽しみながら続けたい、好きなことを通して A 児の成長が促されていると語っていた。エンゲージメントには、親にとって、自身や子どもの将来に向けて希望を抱くようになる意味があるのではないかと推察される。これまでのダウン症研究では、親が将来に向けて希望を抱く情報提供が必要とされている (Melvin et al., 2019)。また、Steffensen et al. (2022) も希望に着目しており、希望は親のセンスメイキング (自分が置かれた状況や、これまでの経験に意味を見出し、状況や経験を望ましい方向に調整する) の鍵と考えられている。子どものエンゲージメントが親の希望となり、親のセンスメイキング形成にも貢献するのか、この点については今後の課題として検討を重ねる必要がある。

3. 本研究の限界

最後に、本研究の限界を述べる。第 1 に、面接期間の限界として、well-being の差が拡大し始める時期のエンゲージメントの循環プロセスしか可視化していない点である。その結果、概ね 2 年生と 3 年生の間で、社会的文脈が親から親以外に移行した可能性が認められるが、重要な社会的文脈の広がりについては検討の余地が残されている。今後は、親以外の語りを加えて、例えば、実際に飼育員になるまでのエンゲージメントの循環プロセスを明らかにし、ダウン症児 (者) におけるエンゲージメントの拡張的な意味を検討する必要があるだろう。

第 2 に、個別具体性のある情報提供に留まっている点である。一人一人の学齢期ダウン症児が、何に対してエンゲージメントを表出するかは多様である。今後は、事例検討を重ねて、径路の共通点・相違点を明らかにしたり、径路の類型を明らかにしたりする必要があるだろう。

謝辞

本研究の分析にあたりご指導を賜りました広島大学の中坪史典教授に心から感謝申し上げます。また、複数年にわたって相談機関に通い、多彩なエンゲージメント表出を見せてくれた A 児にも心から「ありがとう」をお伝えさせていただきます。

文献

- 1) 橋本創一. 運動機能の発達. 菅野敦・玉井邦夫・橋本創一(編)「ダウン症ハンドブック」, 2005a, 24-25, 日本文化科学社.
- 2) 池田由紀江. 身体および精神発達. 日暮眞・飯沼和三・池田由紀江(共著)「ダウン症」, 1983, 121-129, 医歯薬出版.
- 3) 池田由紀江. ダウン症児のことばの発達に関する基礎知識. 池田由紀江・菅野敦(編著)「ダウン症児のことばを育てる-0歳から生活のなかで-」, 1994, 20-28, 福村出版.
- 4) 菅野敦. ダウン症児のことばの発達と指導. 池田由紀江・菅野敦(編著)「ダウン症児のことばを育てる-0歳から生活のなかで-」, 1994, 30-44, 福村出版.
- 5) 小林繁一. 発育・発達. 諏訪まゆみ(編著)「ダウン症のすべて」, 2021, 31-38, 中外医学社.
- 6) 黄素芬・窪田庸子・大井学. ダウン症をもつ子どもと母親との相互作用に関する台湾と日本の比較研究-母親の会話スタイルと子どもの表出言語発達の関連-. コミュニケーション障害学, 2006, 23, 9-15. DOI: 10.11219/jjcomdis2003.23.9
- 7) 水田めくみ. ダウン症児の言語・コミュニケーションの特徴とインリアル・アプローチによる療育. 脳と発達, 2018, 50, 115-120. DOI: 10.11251/ojjsen.50.115
- 8) 小島道生. その子らしさを伸ばす-学齢期ダウン症児の支援-. 脳と発達, 2018, 50, 125-127. DOI: 10.11251/ojjsen.50.125
- 9) 本山方子・無藤隆. 小学生の詩の暗唱活動におけるレパトリーの形成-自主学習の授業における個性の生成と学級文化の生成との連動-. 子ども社会研究, 1999, 5, 29-42. DOI: 10.57410/jschildstudy.5.0_29
- 10) 梶井芳明. 児童の作文はどのように評価されるのか?-評価項目の妥当性・信頼性の検討と教員の評価観の解明-. 教育心理学研究, 2001, 49, 480-490. DOI: 10.5926/jjep1953.49.4_480
- 11) 本山方子. 小学3年生の発表活動における発表者の自立過程-「声が小さい」ことの問題化と「その子らしさ」の発見を中心に-. 質的心理学研究, 2004, 3, 49-75. DOI: 10.24525/jaqp.3.1_49
- 12) 小松孝至・紺野智衣里. 小学校3年生の日記における子どもの自己のあらわれ-記号論的アプローチによる探索的考察-. 発達心理学研究, 2014, 25, 323-335. DOI: 10.11201/jjdp.25.323
- 13) 三ヶ田智弘・市川雪絵・藤浦清香・井倉洋二. 多様性の時代と持続可能な社会を見据えた野外教育のあり方を考える. 野外教育研究, 2023, 26, 101-121. DOI: 10.11317/joej.2023_0007
- 14) 正村公宏. ダウン症の子をもって. 2001, 新潮文庫.
- 15) Carless D & Douglas K. Narrative research. *The Journal of Positive Psychology*, 2017, 12, 307-308. DOI: 10.1080/17439760.2016.1262611
- 16) Alesi M & Pepi A. Physical activity engagement in young people with down syndrome: Investigating parental beliefs. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*, 2017, 30, 71-83. DOI: 10.1111/jar.12220

- 17) Deakin K & Jahoda A. A supporting role: Mothers' perceptions of their child's developing awareness of down syndrome. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*, 2020, 33, 1380-1389. DOI: 10.1111/jar.12765
- 18) Melvin K, Meyer C & Ryan B. "We don't know what we don't know": Providing information about communication to families of children with down syndrome. *Child: Care, Health and Development*, 2019, 45, 423-432. DOI: 10.1111/cch.12658
- 19) Steffensen EH, Rosvig LH, Santoro S, Pedersen LH, Vogel I & Lou S. Parenting a child with down syndrome: A qualitative study of everyday practices in Danish families. *Journal of Genetic Counseling*, 2022, 31, 758-770. DOI: 10.1002/jgc4.1542
- 20) Shields N, Leonard H, Munteanu S, Bourke J, Lim P, Taylor NF et al. Parent-reported health-related quality of life of children with down syndrome: A descriptive study. *Developmental Medicine and Child Neurology*, 2018, 60, 402-408. DOI: 10.1111/dmcn.13670
- 21) Fatima I & Suhail K. Belief in a just world and subjective well-being: Mothers of normal and down syndrome children. *International Journal of Psychology*, 2010, 45, 461-468. DOI: 10.1080/00207591003774519
- 22) Lee A, Knafl G, Knafl K & Riper MV. Quality of life in individuals with down syndrome aged 4 to 21 years. *Child: Care, Health and Development*, 2021, 47, 85-93. DOI: 10.1111/cch.12815
- 23) Seligman MEP. *Flourish: A New Understanding of Happiness and Well-being and How to Achieve Them*. 2011, Nicholas Brealey Publishing, London.
- 24) Seligman MEP. PERMA and the building blocks of well-being. *The Journal of Positive Psychology*, 2018, 13, 333-335. DOI: 10.1080/17439760.2018.1437466
- 25) Fredricks JA, Blumenfeld PC & Paris AH. School engagement: Potential of the concept, state of the evidence. *Review of Educational Research*, 2004, 74, 59-109. DOI: 10.3102/00346543074001059
- 26) Christenson SL, Reschly AL & Wylie C. *Handbook of Research on Student Engagement*. 2012, Springer, New York.
- 27) Skinner EA & Pitzer JR. Developmental Dynamics of Student Engagement, Coping, and Everyday Resilience. Christenson SL, Reschly AL & Wylie C (Eds.) *Handbook of Research on Student Engagement*, 2012, 21-44, Springer, New York.
- 28) 鹿毛雅治. 学習意欲の理論・動機づけの教育心理学-. 2013, 金子書房.
- 29) Skinner EA. Engagement and Disaffection as Central to Processes of Motivational Resilience and Development. Wentzel KR & Miele DB (Eds.) *Handbook of Motivation at School (2nd Ed.)*, 2016, 145-168, Routledge, New York.
- 30) Skinner EA. Engagement and Motivation during Childhood. Hupp S & Jewell JD (Eds.) *The Encyclopedia of Child and Adolescent Development Volume 4 Emotion in Childhood*, 2020, 1485-1498, John Wiley & Sons Inc New York, United States.
- 31) Fredricks JA & McColskey W. The Measurement of Student Engagement: A Comparative Analysis of Various Methods and Student Self-report Instruments. Christenson SL, Reschly AL & Wylie C (Eds.) *Handbook of Research on Student Engagement*, 2012, 763-782, Springer, New York.

- 32) Thiessen D. Student knowledge, engagement, and voice in educational reform. *Curriculum Inquiry*, 2006, 36, 345-358. DOI: 10.1111/j.1467-873X.2006.00362.x
- 33) Yazzie-Mintz E & McCormick K. Finding the Humanity in the Data: Understanding, Measuring, and Strengthening Student Engagement. Christenson SL, Reschly AL & Wylie C (Eds.) *Handbook of Research on Student Engagement*, 2012, 743-761, Springer, New York.
- 34) Rickert NP & Skinner EA. Parent and teacher involvement and the development of students' academic engagement: A growth curve analysis over four time points. *Journal of Adolescence*, 2022, 94, 224-239. DOI: 10.1002/jad.12019
- 35) Underwood K & Killoran I. Parent and family perception of engagement: Lessons from early years programs and supports. *Canadian Journal of Education*, 2012, 35, 376-414. DOI: 10.2307/canajeducrevucan.35.4.376
- 36) Skinner EA & Belmont MJ. Motivation in the classroom: Reciprocal effects of teacher behavior and student engagement across the school year. *Journal of Educational Psychology*, 1993, 85, 571-581. DOI: 10.1037/0022-0663.85.4.571
- 37) Wang M-T & Hofkens TL. Beyond classroom academics: A school-wide and multi-contextual perspective on student engagement in school. *Adolescent Research Review*, 2019, 5, 419-433. DOI: 10.1007/s40894-019-00115-z
- 38) Riper MV. Maternal perceptions of family-provider relationships and well-being in families of children with down syndrome. *Research in Nursing & Health*, 1999, 22, 357-368. DOI: 10.1002/(sici)1098-240x(199910)22:5<357::aid-nur2>3.0.co;2-q
- 39) Heller T, Hsieh K & Rimmer JH. Attitudinal and psychosocial outcomes of a fitness and health education program on adults with down syndrome. *American Journal on Mental Retardation*, 2004, 109, 175-185. DOI: 10.1352/0895-8017(2004)109<175:AAPOOA>2.0.CO;2
- 40) Barnoy S, Biton A & Itzhaki M. Social inclusion of children with down syndrome: Jewish and Muslim mothers' knowledge, attitudes, beliefs, and behavioral intentions. *Journal of Pediatric Nursing*, 2017, 35, 50-56. DOI: 10.1016/j.pedn.2017.02.035
- 41) Sloper P, Turner S, Knussen C & Cunningham C. Social life of school children with down's syndrome. *Child: Care, Health and Development*, 1990, 16, 235-251. DOI: 10.1111/j.1365-2214.1990.tb00658.x
- 42) Bertrand R. Parents' perspective on having a child with down syndrome in France. *American Journal of Medical Genetics Part A*, 2019, 179, 770-781. DOI: 10.1002/ajmg.a.61102
- 43) Porter HL, Braza MD, Knox R, Vicente M, Buss E & Leibold LJ. "I think it impacts all areas of his life": Perspectives on hearing from mothers of individuals with down syndrome. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*, 2023, 36, 333-342. DOI: 10.1111/jar.13062
- 44) 塚田薫代. 読書. 諏訪まゆみ(編著)「ダウン症のすべて」, 2021, 271-274, 中外医学社.
- 45) 橋本創一. 文字・文字指導. 菅野敦・玉井邦夫・橋本創一(編)「ダウン症ハンドブック」, 2005b, 104-106, 日本文化科学社.

- 46) 橋本創一. 遊び場面. 菅野敦・玉井邦夫・橋本創一(編)「ダウン症ハンドブック」, 2005c, 119-124, 日本文化科学社.
- 47) 橋本創一. 学齢児のことばの指導. 池田由紀江・菅野敦(編著)「ダウン症児のことばを育てる-0歳から生活のなかで-」, 1994, 100-117, 福村出版.
- 48) 腰川一恵. 遊びの発達. 菅野敦・玉井邦夫・橋本創一(編)「ダウン症ハンドブック」, 2005, 39-40, 日本文化科学社.
- 49) 若松美沙・若松昭彦. 学ぶ環境を創造するエンゲージメント研究の動向と展望-特別活動に着目した一考察-. 学級経営心理学研究, 2021, 10, 65-78.
- 50) Fordham L, Gibson F & Bowes J. Information and professional support: Key factors in the provision of family-centered early childhood intervention services. *Child: Care, Health and Development*, 2012, 38, 647-653. DOI: 10.1111/j.1365-2214.2011.01324.x
- 51) 徳田治子. インタビューの方法. やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也(編集委員)「質的心理学ハンドブック」, 2013, 307-323, 新曜社.
- 52) 徳田治子. 半構造化インタビュー. 能智正博(編集代表)「質的心理学辞典」, 2018, 255, 新曜社
- 53) サトウタツヤ. TEA というアプローチ. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編著)「TEA 理論編-複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ-」, 2015, 3-28, 新曜社.
- 54) 芝崎文子. ADHD を自認する成人のレジリエンスのプロセス-外的リソースの獲得・活用に着目して-. 質的心理学研究, 2023, 22, 276-295. DOI: 10.24525/jaqp.22.1_276
- 55) 安田裕子・サトウタツヤ. 複線径路等至性アプローチ-基礎編-. 日本心理学会大会発表論文集, 2020, 84, TWS-010. DOI: 10.4992/pacjpa.84.0_TWS-009
- 56) 上川多恵子. TEA の基本概念一覧. 上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美(編著)「カタログ TEA-図で響きあう-」, 2023, 5-10, 新曜社.
- 57) 安田裕子. TEM の基本と展開. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編著)「TEA 理論編-複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ-」, 2015, 29-51, 新曜社.



JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Changwan HAN
Shimonoseki City University

EXECUTIVE EDITORS

Aiko KOHARA Human-services Action for the Next- innovation Research Foundation	Kazuhito NOGUCHI Tohoku University	Naotaka WATANABE Shimonoseki City University
Atsushi TANAKA Sapporo Gakuin University	Keita SUZUKI Kochi University	Shogo HIRATA Ibaraki Christian University
Chaeyoon CHO Shimonoseki City University	Kenji WATANABE Kio University	Takahito MASUDA Hirosaki University
Eonji KIM Miyagi Gakuin Women's University	Kohei MORI Mie University	Takashi NAKAMURA University of Teacher Education Fukuoka
Haejin KWON University of the Ryukyus	Liting CHEN Mejiro University	Takeshi YASHIMA Joetsu University of Education
Hideyuki OKUZUMI Tokyo Gakugei University	Mari UMEDA Miyagi Gakuin Women's University	Tomio HOSOBUCHI Saitama University
Ikuno MATSUDA Soongsil University	Mika KATAOKA Kagoshima University	Yoshifumi IKEDA Joetsu University of Education
	Nagako KASHIKI Ehime University	

EDITORIAL STAFF

EDITORIAL ASSISTANTS

Haruna TERUYA University of the Ryukyus
Natsuki YANO Human-services Action for the Next-innovation Research Foundation

as of April 1, 2023

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

VOL.13 AUGUST 2024

© 2024 Asian Society of Human Services

Presidents | Masahiro KOHZUKI & Injae LEE
Publisher | Asian Society of Human Services
50-1, Shimotsukiyamacho, Murasakino, Kita-ku, Kyoto-city, Kyoto, 603-8222, Japan
E-mail: ash201091@gmail.com
Production | Asian Society of Human Services Press
50-1, Shimotsukiyamacho, Murasakino, Kita-ku, Kyoto-city, Kyoto, 603-8222, Japan
E-mail: ash201091@gmail.com

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION
VOL.13 AUGUST 2024
CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

- Circular Processes of Engagement in School Aged Down Syndrome Child;
Through a Multi-year Analysis of Parent's Narratives
Misa WAKAMATSU, et al. 1
- Development of Guidelines to Support Career Guidance for Upper Secondary Teachers
of Special Needs Schools;
Through Consensus Building Using the Delphi Method
Aya IMAI, et al. 22
- Facial Expression Recognition in Mask-wearing Faces in Japanese Preschool Children
Seiji KOGA, et al. 36
- Needs and Current Status of Persons with Disabilities in the Noto Peninsula Earthquake:
A Text Mining Analysis from the Perspective of Disaster Relief Workers
Yuki MOCHIHARA 49
- Comparison of the Implementation Status of Disability Simulation in Elementary School;
Through a Survey of Teachers at University-affiliated Elementary School in Japan and Taiwan
Hsuanling CHEN, et al. 64
- Comparison of Japan and South Korea Regarding Guidance Course and Contents for
Students with Severe and Multiple Disabilities in Special Needs School
Minji KIM, et al. 83

ACTIVITY REPORT

- A Study on the Effects of Differences in Learning Activities in Exchange and Collaborative
Learning on the Interaction and Learning of Children in Regular Classes;
Focusing Instead on Two-way Interactions
Tatsuya HIRATSUKA, et al. 105